

国語科授業実践研究部

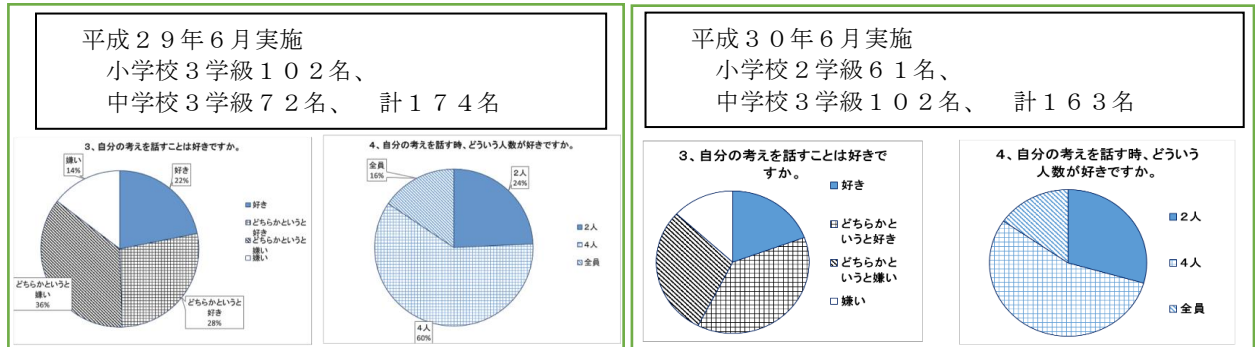
I 研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの指導の工夫
～言葉による見方・考え方を働かせるための言語活動の研究～

II 主題設定の理由

研究主題「主体的・対話的で深い学びの視点からの指導の工夫」を受け、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善に向けて国語科研究員の各所属校における実態を話し合った。その結果、対話を深めることが難しい、物事を広くと捉えられない、言葉の語彙が少ないなどの課題が挙げられ、児童生徒が主体的に話したり聞いたりする力について特に課題を感じていることが明らかとなった。そこで、更に詳しく分析するために、以下のアンケート調査を行った。

—国語アンケート—



2年間にわたるアンケート結果は次のとおりである。

国語の学習を好きだと感じている児童生徒は、66%
自分の考えを書くことが好きな児童生徒は、56%
自分の考えを話すことが好きな児童生徒は、50%
相手の考えを聞くことが好きな児童生徒は、93%

この結果から、「相手の考えを聞くことが好き」と答えた児童生徒の数が多いことが分かった。聞くことが好きな理由として、「新しい発見ができるから」、「自分の意見にもっとよいものが付け加えられるかもしれないから」ということを挙げている。このことから、児童生徒は他者の考えや知識から学ぶことに意欲的だと考えられた。

一方で、自分の考えを話すことが苦手な理由として、「もし自分の考えが違っていたら恥ずかしいから」、「もっと話す練習をしたら好きになると思う」ということを挙げている。つまり、児童生徒には話すことに緊張感や抵抗感などがあると考えられた。

そこで、児童生徒が話し合いをしやすいと感じる人数を調査した。このアンケート内容では、「話す」「聞く」とともに4人程度が圧倒的に多かった。特に話をするときには4人がよい、という児童生徒が圧倒的に多い。理由として、4人の時には、「自信がなくても話すことができる」、「聞き手もよく聞いてくれる」、ということが挙げられた。

これらの児童生徒の実態から、聞く・話す活動を行う際には学習形態を工夫し、その活動を日常的に授業の中に取り入れ、国語科の主体的・対話的で深い学びの実現を目指していく、という方向で研究を進めていくことになった。

——主題設定までの課題把握——

- 課題である「対話を深める」「話すことが苦手」という実態を踏まえ、他者との交流を通じて考えを深めたり、広げたり、違う見方を見付けたりしながら学習を進めていく。
- 他者との学びを円滑に行い、自己の変容を見とるために、どのように学習を進めるべきか具体的な手立てを掲げ、実践検証していく。

III 研究の計画

このような学びを実現するために、本研究では次に挙げる工夫を行った上で、更にどのような手立てや仕掛けを行えば効果的であるかを研究していく。

1 深い学びのための資質能力育成の工夫

言葉による見方・考え方を働かせるためには、課題解決を行う際に児童生徒自身が、「理解のための方法」を使えるようにしていくことが重要である。そこで、以下の能力を伸ばしていけるよう、教師・児童生徒が共に、理解のための7つの方法を認識した上で課題解決を図る授業を行っていく。

- ① 質問する力（既知の情報をもとに未知の対象に切り込む力をみつける）
- ② 大切なことを見極める力（選択したり、選択した根拠を考える）
- ③ まとめる力（分かったことを関連付けて、解釈する）
- ④ 推論する力（結び付け、関連付けて、考える、想像する）
- ⑤ イメージを描く力（本や文章の空所を想像力で補ったり、断片を結び付けたりする）
- ⑥ 編集する力（情報を関連付け、構成する）
- ⑦ 察し合う力（他者の考えや思いを、表情や行動や言葉を手掛かりに理解しようとする）

上記7項目を発達段階・単元・学級の実態に応じて分かりやすく児童生徒に示し、身に付けたい力が何なのか確認しながら学習を進めていくことで、主体的に学習に臨み、より深い学びができると考える。

2 望ましい学習集団の形成と学習形態の工夫

話し合いにおけるペア学習、グループ学習、全体学習のそれぞれの特性を見極め、単元及び授業においてどの部分にどのような話し合いの形態を取り入れればよいのかを探っていく。特に発表することに苦手意識をもつ児童生徒が話をしやすくするためのグループ学習では、友達の考えを温かく受け入れられるような人間関係作りを土台に、自分と異なった意見にも理解を示すことが出来るような場を設定していく。そうすることで、「言葉が持つ曖昧性や表現による受け取り方の違いを認識して、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度や、集団としての考えを発展・深化しようとする態度」が養われていくと考える。

IV 実践例

1 事例1（小学2年生）

教材名	「お手紙」 アーノルド＝ローベル
単元名	かえるくんとがまくんのやさしさとおもしろさをみつけよう。
単元の目標	想像を広げて読み進めることができる。
時間数	全10時間
本単元で付けたい力	◎想像をふくらませながら登場人物の心情を読み取ることができる。 ○かえるくんがまくんシリーズから、やさしさとおもしろさを自分で見付け表現することができる。

(1) 言葉による見方・考え方を働かせるための7つの工夫(②、③、⑤を実施)

1	質問する力	②	大切なことを見極める力	③	まとめる力	4	推論する力
⑤	イメージを描く力	6	編集する力	7	察し合う力		

↓そのために行う言語活動

自分の考えを表現するために、話し合いを通して自分の考えを広げたり、深めたりする。

① 読みを進めるための「国語の学び方」の提示

図1-1は、物語教材「スイミー」を学習したときに児童と作った「国語の学び方」である。児童が読みを深めたり、自分の言葉で表現したりするために必要な力を確認し、他教科でも活用しながら学習を進めている。

図1-2は、「お手紙」の第5時の学習で使用したワークシートである。はじめに自分の考え(かえるくんのやさしさが一番よく分かる箇所とその理由)を書いた後に、意見を交流する。友達の考えで重要だと思ったものは、赤鉛筆でワークシートに書き足してある。最後に、話し合いで自分の考えが深まったかを確認して、再度自分の考えをまとめ直し、青鉛筆でワークシートに記入している。

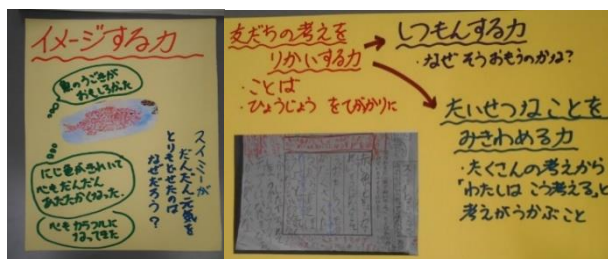


図1-1 教室に掲示してある「国語の学び方」



図1-2 第5時
ワークシート

② 考えを広げるための3人グループでの交流

「お手紙」の表現や内容の面白さを探し、その理由を考える学習では、自分で書いた付箋を持ち寄り、3人グループで話し合いを進めた。話し合いを通して理由を書き加えたり、自分が気付かなかった箇所に気付いたりすることができた。

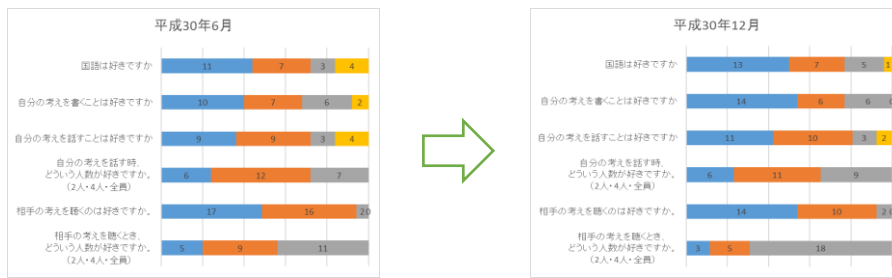
(2) 成果と課題

第3時から第6時まで、かえるくんの優しさを考えながら教材を読み進めた。授業での学び方を毎時間ほぼ同じにすることで、児童は学び方を理解すると共に考えを深めることができるようになってきた。グループやクラス全体でがまくんの優しさについて話し合った後には、ほとんどの児童が自分の考えを少し変えたり付け加えをしたりして、優しさを改めて記述することができた。

3人グループでの学習では、対話を通して自分の考えた箇所や理由以外にも他の児童が考えた箇所に気付くことができた。これは、自分の考えを色分けした付箋に書き、教科書を拡大コピーしたものに付箋を提示しながら意見交換をしたことで、他の児童の考えを理解することができたり、自分では気付かなかったところにもおもしろさが書いてあることに気付いたりすることができたのではないかと考えられる。次の時間には、同じ作者の他のお話から自分で選んだ作品について、かえるくんのやさしさと話の面白さについて自分で考え、ワークシートにまとめることができた。

課題としては、3人グループでの話し合いにより自分の考えがどのように変容したかの振り返りを口頭でしか行えず、児童自身の自己評価が曖昧になった。児童の学びを次に生かすためにも、自己評価をしっかりと行わせるようにしたい。

(3) アンケート結果から見る児童生徒の変容



12月に実施したアンケートでは、国語の好きな児童が11名から13名に増え、嫌いな児童が4名から1名に減っている。また、自分の考えを書くことや話すことが好きな児童が増えている。

これは、「わからなかったことが、みんなで話し合えばわかるようになってうれしかった。」「いろいろな言葉を覚えて、そのお話に合う文章が書けるようになってきた。」「文章を書くときに、友達の考えのいいところを見付けられるようになった。」などの児童の記述から、話し合いを通して心情を読み取る力や語彙力が高まったことを実感できる児童が多かったこと、言語活動に楽しんで臨んでいたことが数値に反映されたものと考えられる。

2 事例2 (小学5年生)

教材名	「大造じいさんとガン」
単元名	「みりよく発見ノート」で椋鳩十の世界を学習しよう。
単元の目標	すぐれた表現に着目して、物語のみりよくを伝え合おう。
時間数	全8時間
本単元で付けたい力	<ul style="list-style-type: none"> ◎登場人物の人柄や心情、残雪と大造じいさんの行動や「知恵比べ」など、場面の情景を叙述に即して読むことができること。 ○人物の心情や場面の様子を表す表現を味わいながら読み、友だちの発表を聞いて、感想を伝え合っている。

(1) 言葉による見方・考え方を働かせるための7つの工夫 (⑤、⑦を実施)

1	質問する力	2	大切なことを見極める力	3	まとめる力	4	推論する力
⑤	イメージを描く力	6	編集する力	⑦	察し合う力		

椋鳩十の最も伝えたい内容を考えるため「付箋を使って、魅力的な表現やキーワードを書き出す」言語活動を行い、登場人物の心情を読み取る。

↓そのために行う言語活動

① 一人読み (キーワード・付箋)

付箋を使いながら、キーワードやおさえたい場面について各自読み取っていく (図2-1)。付箋をはり付けたら直接書き込んだりし、必要に応じてイラストや矢印などを交えながら、オリジナルの「みりよく発見ノート」 (図2-1) をつくっていく。



図2-1 伝えたい内容を付箋で整理

② グループ交流

一人読みでまとめた「みりよく発見ノート」を使

い場面ごとの話し合う論点を整理する。めあてに沿った内容を話し合うために、明確な課題を設定する。3人グループで交流し、自分の考えを伝えたり相手の考えを聞き合ったりする活動を行う。(図2-2) 共感したり、新たな考えを見付けたりするなど変容を見取る。

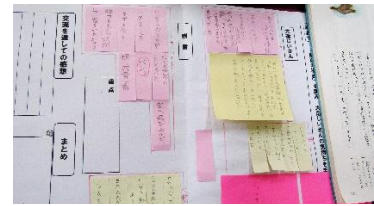


図2-2 交流の様子

③ 全体交流

全体で、論点の内容を整理する。(図2-3) 押さえた心気や情景描写を確認し、叙述に即した心気を読み取りを全体で確認する。学習のまとめを自分の言葉で書き込み、登場人物の言動や行動を理解する。

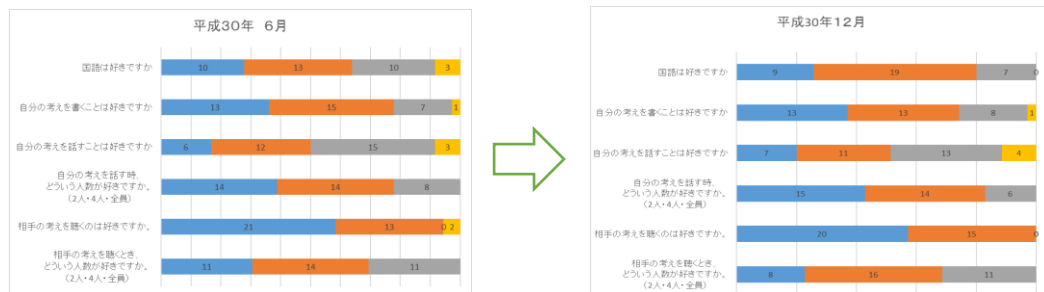


図2-3 交流の様子

(2) 成果と課題

本実践では、登場人物の人柄や心気、場面の情景を叙述に即して読み、それを伝え合う活動を主目標にして学習を進めてきた。そのため、「①魅力を見付ける一人読み ②付箋を使って伝え合うグループ交流 ③内容を深め変容を見取る全体交流」を行い、深い学びの実践に取り組んできた。成果としては、児童が意欲的に付箋を活用し、「キー・センテンス」を集めることができていた。また、話合いの内容を明確に示した、「論点整理」の時間も深い学びにつながる言語活動となったと感じる。他の単元でも、この言語活動は活用できると考えるため、授業の流れや活動内容を今後も実践していきたい。さらに、自分の考えを伝え合う活動を増やしていくことを今後の課題として取り組んでいきたい。

(3) アンケート結果から見る児童生徒の変容



12月に実施したアンケートでは、国語が好きと答える児童が23名から28名に増え、嫌いな児童が減っている。また、自分の考えを書くことや話すことが好きな児童が増えている。さらに、アンケート結果の記述に目を向けると、「物語を読み深めると、伝えたいが増える。」「友達の意見は、自分の考えの材料になるから」などの児童の記述が見られた。

このことから、話合いを通して自己の変容を感じ取り、文章を読み取る力が高まったことを実感できる児童が増えたと考える。

3 事例3 (中学1年生)

教材名	「少年の日の思い出」 ヘルマン・ヘッセ
単元名	自分を見つめて
単元の目標	作品に書かれているものの見方や考え方に触れ、自分の考えを深めようとしている。 作品から読み取ったことをもとに、自分の考えをもち、他者との

	交流を通して自分の考えを深めることができる。
時間数	全7時間
本単元で付きたい力	◎人物の関係を、本文を根拠にしてまとめることができる。 ○読み取ったことに対し自分の意見を書き発表することができる。

(1) 言葉による見方・考え方を働かせるための7つの工夫(②、③を実施)

1	質問する力	②	大切なことを見極める力	③	まとめる力	4	推論する力
5	イメージを描く力	6	編集する力	7	察し合う力		

↓そのために行う言語活動

本文から読み取った内容を、視点を変えて読み直す活動を通して、エーミールの人物像を再考する。

① 付箋の活用

読み取ったことを分かりやすくまとめるために、本文を付箋に書き抜かせた。(図3-1)まず、自分が読み取ったエーミールの人物像から、視点を変えた記述に取り組ませた。また、教室内に辞書を置き、自由に使えるようにして文中の言葉の意味を調べさせた。付箋を活用することにより、生徒がどこまで取り組めたのかを教師が把握しやすくなり、個別指導も適宜行うことができた。



図3-1 付箋の活用

② 学習形態

他の授業でも取り入れられている4人班でのグループワークを展開した(図3-2)。

視点を変えた箇所をお互いに確認し合い、どのように言い換えたか、なぜそのように表現したのか意見交換を行うことができた。



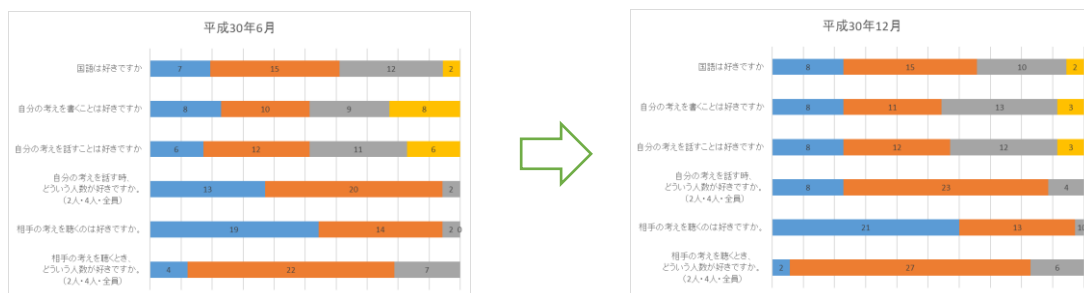
図3-2 グループワークの様子

(2) 成果と課題

付箋の活用では前時からの学習内容をうまく引き継ぎ、思考を整理しながら課題に取り組ませることができた。しかし、前時の読み取りが不十分だった生徒は、再度本文からエーミールの人物像を読み取ったり、読み取りはできていても語句の意味調べにほとんどの時間を費やしてしまったりしていた。この情報量の差を埋め、エーミールの人物像について共通の課題を持って取り組ませるために、前時の読み取りで多くの生徒が書き抜いていた部分や、教師が視点を変えて考えさせたいところを指定しておくことで、じっくりと考えることができたと思う。

話合いでは意見交換をしたものの、論点が明確になっていなかったために、結論やまとめが十分ではない生徒もいた。話合い、対話の目的を生徒に理解させた上で取り組ませる必要があった。

(3) アンケート結果から見る児童生徒の変容



全体として、各項目とも大きな変化は見られなかった。しかし、「自分の考えを話すのが好き」、「どちらかという好き」と答える生徒がわずかながら増加した。これには生徒が活動しやすい4人班でのグループワークを取り入れた効果が現れたのだと考える。また、隣同士や、班での意見交換、確認の時間を設けた後で挙手させるようにしたところ、積極的に挙手ができる生徒が増えた。生徒からは、「いきなり発表するよりも、その前に近くの人と意見交換したり、確認したりする時間があると、自分の考えや意見の確認ができ、全体でも発表しやすくなる。」、「同じ班の人なら意見を言いやすいし、分からないところや不安なところを聞きやすい。」という意見が挙がった。

4 事例4 (中学校2年生)

教材名	「根拠を明確にして意見を書こう」
単元名	論理を捉えて
単元の目標	自分の立場を明らかにし、その根拠となる事実や例、反対意見等含め、構成・順序を考えて書くことができる。
時間数	全4時間
本単元で付けたい力	<ul style="list-style-type: none"> ◎交流を通し、根拠をより説得力のあるものにすることができる。 ○友達の見解を取り入れ、根拠をより説得力のあるものにすることができる。

(1) 言葉による見方・考え方を働かせるための7つの工夫 (①、③、⑥を実施)

①	質問する力	2	大切なことを見極める力	③	まとめる力	4	推論する力
5	イメージを描く力	⑥	編集する力	7	察し合う力		

意見文を書く活動の前に話し合いを取り入れて、相手意識を持たせ、自分の意見の根拠を、より説得力のあるものにします。

↓そのために行う言語活動

① 単元の順序の工夫

1つ前の単元において「パネルディスカッション」を行い、様々な意見を出させる活動を行った。そこで深めたテーマを用いて意見文を作成させ、よりよい根拠、反論を選ばせた。この順序の工夫によって、根拠が全く挙げられないといった生徒がいなくなり、意見を支える根拠の説得力への意識化にもつながった。

② 評価の見える化

根拠を説得力のあるものにするといいても、具体的には分かりづらい。そこで、

あらかじめ評価を提示し（図4-1）、全員が目標とする評価に達することができるように工夫した。その結果、どこを観点に話し合いをしていくのかということが明確になり、話し合い活動も限られた時間の中で活発に行うことができた。

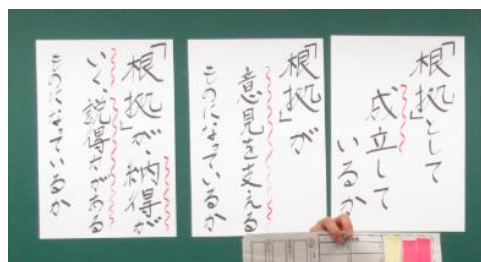


図4-1 評価の提示

③ ワークシートの工夫、付箋の活用

意見文を書く上で、各授業での流れを説明するものと、意見文下書きシートと、大きく二つに分けて作成した。また、付箋を用いた活動では、助言（ピンク）、良いところ（黄）を両方書き、グループで交換した（図4-2）。この活動により、積極的に授業に参加する生徒や自信を持って意見文を書ける生徒が増えた。個人の振り返りの時間も設けたため、最後の全体共有の場でも多くの生徒の発言が見られた。

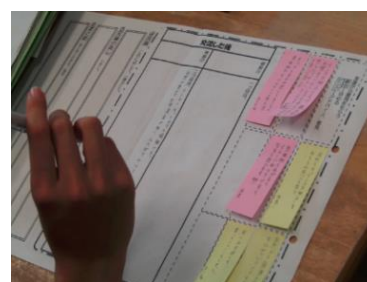


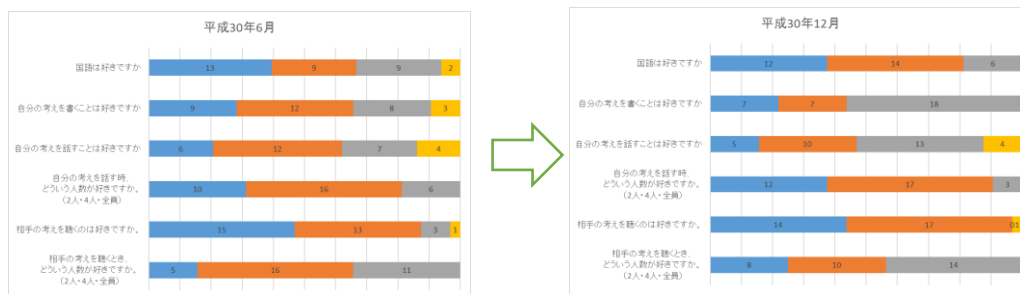
図4-2 付箋の活用

(2) 成果と課題

単元を通して、意見文を書く力を身に付けさせるといった試みは初めてであったが、でき上がった意見文を見てもほとんどの生徒が最後まで書ききれており、根拠の部分はかなり説得力をもった文になっている生徒が多く見られた。

課題としては、学習意欲を高めるといった点から、生徒が興味関心のあるテーマを自分たちで考えだすことを視野に入れた授業展開を試みたい。

(3) アンケート結果から見る児童生徒の変容



12月に実施したアンケートでは、国語の好きな生徒が21名から26名に増え、嫌いな生徒が11名から6名に減っている。また、相手の考えを聞くのが好きな生徒が増えている。

生徒の記述から、「様々な意見を聞き、考えさせられるから。」「今まで知らなかったことに気付けるから。」「同じことを考えていたら共感できるから。」などの意見が見られた。

話し合いを通して、第三者の視点を持つことの大切さに気付いたり、グループ活動の中で意見やアドバイスを行うことで共感や気付きが生まれたりし、言語活動を行うことの意味を感じることができた生徒が増加したと考えられる。

5 事例5 (中学校3年生)

教材名	「君待つと一万葉・古今・新古今」
単元名	和歌の鑑賞文を書こう
単元の目標	和歌に書かれた「心情」「情景」を考え鑑賞文の材料を集めることができる。
時間数	全3時間
本単元で付きたい力	<p>◎和歌の言葉を理解し、描かれた情景や心情を考えることができる。</p> <p>○和歌を読んで分かったことや考えたことを、ワークシートに記述することができる。</p>

(1) 言葉による見方・考え方を働かせるための7つの工夫 (③、⑤を実施)

1	質問する力	2	大切なことを見極める力	③	まとめる力	4	推論する力
⑤	イメージを描く力	6	編集する力	7	察し合う力		

↓そのために行う言語活動

和歌について分かることを書き出し、そこから想像できる「心情」「情景」を考えて書き、他の人と意見を交換し合う。

① 学習形態の工夫

和歌の内容についての交流時間は、「3～4人班で意見を交換する時間」とした。和歌には書かれていない作者の心情や、季節について話題にあがったことについて、班の中で議論させ、「ふさわしいのはどの意見？」と投げかけながら話合いが深まるようにした。想像を膨らませるのが難しい生徒でも、同じ和歌を読んだ人の考えを聞くことで、自分のワークシートを記入することができた。

② ミッションカードの活用

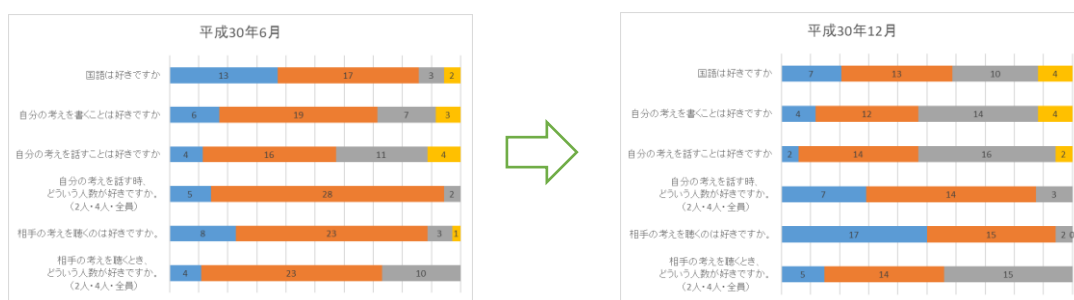
本校の生徒にとって、字数の少ない和歌の中から、書かれていないことを想像することはかなり難しい学習過程である。そこで、「作者はなぜこんな風に考えているの?」「作者と相手はどんな関係にあるの?」など、解釈文の内容にはない問いが書かれた「ミッションカード」を用意した。個の学習場面で、このカードの言葉を投げかけ、ワークシートに取り組みさせた。また、意見交換の時間にも「ミッションカード」をグループの生徒に見せながらアドバイスした。

(2) 成果と課題

書くことに抵抗を感じている生徒にとって、3～4人の班での話合いは自分の意見を書く礎となった。他の生徒の意見を参考にすることで、根気強く最後まで書くことができ、ワークシートに書けたという達成感を味わわせることにもつながった。

中学3年での古典学習は限られた指導時間で実践しなければならない。そのため、指導内容と単元計画を煮詰め、生徒がより理解しやすい授業を進めなければならない。今後は、画像を添付したミッションカードを提示するなどして、古典の世界をより豊かにイメージできるように支援していきたい。

(3) アンケート結果から見る児童生徒の変容



書くことや話すことが好きな生徒と聞くことが好きな生徒とを比較すると、聞くことが好きと感じている生徒が圧倒的に多いことが分かる。これまで、対話的な学習活動を通して意見交換を進めてきた結果がここに表れていると考えられる。今後は、対話を生かして、自分の考えを広げたり深めたりした上で、書く・話す活動に意欲的に取り組めるような授業展開を試みたい。

V 研究のまとめと今後の展望

各学校での実践を通して効果的だったと考えられることに、児童生徒が学び方を理解しながら学習することが挙げられた。特に小学校において、何を学ぶか・どう学ぶかを意識しながら学習に臨んだ時には、単元や年間の学習に対しての見通しを持つことができ、学びに対する意欲も高まることが児童アンケートの記述でも確認することができた。一方、中学校では、ほとんどの生徒が学び方を理解することができるが、学力の差が大きいという課題に対し、少人数での対話的な学習が有効であることが確認できた。

また、研究員の各実践では、言葉による見方・考え方を働かせるための手立てが工夫されていた。例えば「お手紙」や「少年の日の思い出」、「根拠を明確にして意見を書こう」では、教師が視点を提示したものを手掛かりに児童生徒が学習を進めた。一方、「大造じいさんとがん」や「君待つと一万葉・古今・新古今」では、児童生徒の自由な読みや思いを基にして、教師が視点を与えながら、児童生徒が論点整理していくという授業展開を図った。このように、児童生徒の言葉による見方・考え方を働かせるため、様々な角度から指導法の工夫改善を図ったことで、児童生徒が言葉を豊かに捉えながら国語の資質・能力を培っていく基盤を築くことができたのではないかと考えている。

最後に、本研究では教師の明確な意図のもとで情報を関連付ける・多面的に考える・構造化するなどの思考のスキルを児童生徒に身に付けさせてきた。今後は、児童生徒自身が見通しを持ってこうした力を活用し、言葉による見方・考え方を働かせながら自立した学びを進めていけるよう、研究を積み重ねていきたい。

参考文献

- ・ 文部科学省 平成 28 年 11 月 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）補足資料』
- ・ 吉田裕久・富山哲也他国語教育編集部 2017 年 『学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校国語』 明治図書
- ・ 山元隆春 2016 年 『アクティブラーニングの授業展開』 東洋館出版社
- ・ 中村和弘 2018 年 『見方・考え方[国語科編]』 東洋館出版社
- ・ 山本茂喜 2018 年 『思考ツールでの国語の「深い学び」』 東洋館出版社